

美しい足跡

劇作家・演出家 俳優

藤井颯太郎

1995年生まれ。兵庫県立宝塚高校 演劇科在学中、幻灯劇場を旗揚げ。18歳の時に書いた戯曲「ミルエ・メロリオ」でセンダイ編劇曲賞を最年少受賞。近年は、架空のホテルに宿泊しながら観劇する「泊まれる演劇シリーズ」の演出を手掛けた。NHK連続テレビ小説『ちよん』に出演したり、ABCテレビ「THE GREATST SHOW MEN」でAえ！グロップ！ラボ！音楽劇を発表するなど、多方面で頑張っている。

他人の部屋に土足で上がり込む。その非日常に名波は未だ慣れることができない。半年前、叔父に頼まれはじめた残置物撤去のバイトは、思っていたよりも厳しい仕事だった。廃業した店に放置された機材や、夜逃げした家に残された家財、依頼があれば死した住人の遺品整理まで、残されたものを片っ端から仕分けし処分する。体力や汚物への耐性が求められるのはもちろん、他人の生活空間に土足で上がり込む感覚に鈍くならなければこの仕事は務まらない。

撤去作業中、名波は高音量でクラシックを聴く。残されたものがまどう時間の重たさに引つ張られてしまうと、訳もなく心が沈んでしまうからだ。イヤホンから流れる賑やかな音楽に乗せて、なるべく手を止めず、なるべく早くゴミ袋を満たす。ペーター・ヴェンやドヴォルザーク、ワーグナーを聴きながら手を動かす間だけは、割れた写真立てや片足だけの子供靴がまどう時間の重たさから、解放される気がした。

ある日、珍しい仕事が舞い込んできた。「私は五日後に死ぬ。死ぬ前に遺品整理をしてほしい」という依頼だ。依頼人は高月という名の年老いた男で「作業員は名波という男、一人だけに任せたい」という奇妙な注文も付け足してきた。「ご病氣かなにかですか？」名波が不機に質問すると「ごも悪くない」と高月は答えた。「この年になると一週間後程度の未来はわかるようになるもんですよ。君がここへ来ることも、死因について興味を持つことも」自宅の玄関で靴を脱いでから老人は付け加えた。「死因は老衰だ」

高月の家は大きな湖の畔にある。景色は悪くないが湿気がひどく、家中カビだらけだ。さらに高月は膝を悪くしていて、部屋の床がフローリングが畳かもわからないほどゴミで溢れかえっている。五日の猶予があるとはいえ、一人での作業は困難を極めた。五時間ほど作業を続けやっと床が見え始めた頃、名波は縁側の床板に、行儀良く並んだ誰かの足跡を見つけた。名波の手を止めたのはその足跡の美しさだった。程よい肉付き、しっかりと引き上げられた土踏まず、地面を踏みしめる長く美しい5本の指。この仕事を始めてから名波は様々な足跡を見てきたが、これほど美しい足跡に出会ったのはこれが初めてだった。

「ご挨拶を」名波が足跡に見惚れていると、老人が縁側へやってきて足跡に向かってそう言った。すると、足跡が名波へ向かって一歩、二歩三歩と近づいた、ように見えた。「それが、最も扱いに困っているものです」名波には何が起きているのか理解できなかつた。「この子はミカの、私の娘の足跡です」

海外旅行へ行った娘が行方不明になってしまったと聞かされた翌日、娘は足跡だけになって帰ってきた。高月は成仏させてやろうと僧侶に相談したが、どうやら幽霊の類ではないらしい。足跡はあくまでただの足跡なのだ。僧侶が試しに足跡を触ってみると、擦れた部分は消えて元に戻らなかつた。「その気になればいつでも消せますよ」そう言われた高月だが、どうしてもその気にはなれなかつた。「足の人差し指が親指より長い人は、親よりも長生きするんだって！」スラリと長い足の人差し指を見せびらかす娘の姿を思い出す。この足跡が娘のものであることは一目でわかつた。それから何年もの間、老人と足跡はこの家で二人暮らしを続けてきたのだ。

父親以外の人間に出会えたことが嬉しかったのか、足跡は名波によく懐いた。足跡は音楽が好きらしく、名波のイヤホンから漏れ聞こえるクラシックを聞くため、部屋から部屋へ名波の後をついてきた。名波がイヤホンを片方外し足跡のそばに置くと、足跡は音楽に合わせて軽く、揺れるように踊り始めた。名波が地べたに座り込んで休憩していると、名波の足の隣にやってきて、どのくらい足の大きさが違うのか、比べにきたりした。

遺品整理をはじめ四日目の夕方、ほぼ全ての部屋の片付けが終わった頃、名波は綺麗に身なりを整えた高月に呼び出された。「少し予定が早まりそうだが」高月は自分で布団を敷きながら話を続けた。「残る遺品の処分については、そこに置いた遺言書通りにお願いしたい。最後まで面倒をかけて申し訳ない真っ白いシーツを敷き始めた高月に、名波も手を貸す。「足跡。遺言書にはお前への言葉をなにも書いてない」少し遠くに離れていた足跡が、布団に近づくと「お前はもともと気持ちよく伝えるのが上手な子ではなかつたが、前より一層、なを考えているかわからなくなつてしまった。返事をしてくれないから一方的に話しかけ続けた。この数年で、ミカが生きていた頃の何倍も話しかけてしまったと思ふ。遺言書に書くようなことは、もう全部話し終えた」布団にゆつくりと身を沈めながら高月は名波を見上げた。「遺言書にも書けなかつた、足跡のことについてだ。その気になればいつでも消せる。気味が悪ければ一思いに消してやってほしい。でも、君さえ良ければ、これからのこの足跡の面倒を見てもらえないだろうか」老人はか細い声で名波に問いかけ、返事も聞かず息を引き取った。

名波は遺言書に従い、残りの遺品整理とやるべき諸々の手続きを手際よく進めた。死因は本人が言っていた通り老衰だった。高月は身寄りがなかつたので、名波が火葬、納骨まで見届けた。その間、足跡は父親のそばを一時も離れなかつた。自然死があった家は事故物件にならないらしく、湖畔の家は清掃が入ったのち、また誰か別の家主に貸し出されることになるそうだ。最後の作業を終えたあと、足跡は名波を湖へ連れて行った。波打ち際の浜を歩くと、足跡はより一層明瞭になり、より一層美しさを増した。名波と足跡は言葉も交わさず、初夏の湖畔を散歩した。

「君さえ良ければ、うちに来る？」名波は足跡の様子を見る。足跡は表情も変えず、歩き続ける。ああ、このままでどこか歩いていってしまうんだな。そう思うと、名波の歩幅は小さくなっていった。二人の歩調は明らかに違うものになって、次第に二人の距離は開いていった。名波は足を止め、時間とともに美しい足跡が浜辺に増えていくのをぼんやりと見ていた。風が吹き、大きな波が浜の砂を撫でていく。あんなにあつた美しい足跡たちは、瞬で消えてしまつて、今では彼女がどこを歩いているのかすら、わからなくなつてしまつた。美しいものは崩れやすく、崩れやすいものは美しいのかもしれない、と名波は思つた。

